

# トンボはドコまで飛ぶかフォーラムの活動について

代表 吉田洋子

今年度は12年目の活動となり、いろいろ新しい試みを行つてきました。

一つ目は子どもたちと一緒に実行してきた「トンボとり大作戦」を年に一回やるのでなく6月から10月まで入船公園、JFEトンボみちで毎月開催したことです。夏休み一回だけではなくなかなか継続して関わる子どもの発掘にならないため、このような方法を取りました。毎月行つたことで夏の大作戦を含めて多くの子どもたちが参加しました。

二つ目は、中小企業向けの企業緑地講習会を行つたことです。これは12月に企業関係者を含めて48名参加のなかなか盛況な講習会となりました。「ルートーの企業緑地に学ぶ小さな緑をつないでつくる生物多样性」という内容で皆様熱心に聞いていただきました。

三つ目は、今年度調査の報告会を「横浜の水辺と緑を考える子ども会議」と同時開催でトレッサ横浜にて行つたことです。この子ども会議は29回目ということもとても長く続いている会議です。子どもたちも熱心に聞き入り、今後一緒に活動したいといつ声もありました。トンボのぬり絵とヤゴの観察のワークショップも行い、広く多くの方にフォーラムのことを理解していただくよい機会となつたと思います。

フォーラムの歩みはゆっくりですが、着実にこれからも活動を継続していきたいと思っていますので、どうぞ皆様よろしくお願い致します。

2014年度 トンボはドコまで飛ぶかフォーラム 活動内容											
3月	2月	2015 1月	12月	11月	10月	9月	8月	7月	6月	5月	2014 4月
29日 トレッサ横浜 報告会・ワークショップ	3日 事務局会議 報告会・ワークショップ		10日 企業緑地講習会 鶴見公会堂	19日 第5回拡大運営委員会 企業緑地講習会、報告会、報告書 作成について	22日 事務局会議 イベント開催の調整	24日 第4回拡大運営委員会 本調査(内陸部)	17日 第3回拡大運営委員会 本調査実施要領、人員配置等の決定、夏のトンボとり大作戦、企業講習会検討	4日 事務局会議 本調査(臨海部) 4日～9日・16日 夏のトンボ捕り大作戦(入船公園) 本調査(内陸部) 19日～24日	12日 第2回拡大運営委員会 トンボとり大作戦、本調査日程調整、企業 緑地講習会検討	1日 事務局会議 JFE21世紀財團報告 活動報告書配布	16日 第1回拡大運営委員会 トンボとり大作戦チラシ配布 〇27日 JVCケンウッド トンボ池草刈り ・かんきょう横浜連載1
・かんきょう横浜連載6 報告会チラシ配布			・かんきょう横浜連載5	・かんきょう横浜連載4	・かんきょう横浜連載3		・かんきょう横浜連載2 トンボとり大作戦夏チラシ配布				1

# 活動ダイジェスト



これまでの本調査12年間で、計22

種6888頭のトンボを捕獲

標識することができました。企業や公園の緑地がトンボたちにとって里山的役割をはたしていること、新たな池にす

ぐトンボがやつてくるネットワークが存在すること、最優占種シオカラトンボにも種交代のよ

うな逆転がおきること、トンボを通じて臨海部の池と内陸の緑地がつながっていることなど、いくつもの興味深い現象がとらえられています。そして、なによりこうした成果が事業所のビオトープ設置などの環境努力と結びついているのは大きな喜びです。

**さ**て、2014年度のトンボ本調査ですが、臨海部と内陸部あわせて12地点、べ184人の参加者がいました。全地点あわせると11種680頭で、臨海部に限ると7種430頭でした。臨海部でのこの種数は、8月実施となつた2004年以降、過去最低でした。例年ほぼ10種だったのが、この年は毎年必ず捕れる基本6種十1種1頭のみだったのですが、シオカラトンボだけが過去最多の253頭と突出した捕獲数を示しました。また、必ず捕れるアカネ属が1頭も捕獲されていないというのも異例でした。

これら新たに直面した現象の理解には、内陸2池、臨海部の通年調査、そして過去の蓄積記録が役立ち

ました。すでに三ツ池ではこれらの現象が先駆けておきていたらしいこと、また、夏の暑さによる出現の遅れかと思われたアカネ属の8月の喪失が、そつではなかつたことも裏づけられました。ちなみに、2003年度の調査では、アカネ属は6種160頭も捕れていました。昨年だけの現象なのかしつかり今後を見据えていくと同時に、臨海部ビオトープ群の果たすいっそうの役割が期待されます。

〔田口正男（農学博士）〕



調査地点(京浜臨海部)	4日	5日	6日	7日	8日	9日	16日
キリン横浜ビアビレッジ		○	○	○			
JFEトンボみち	○	○	○				
JVCケンウッド	○	○	○				
マツダR&Dセンター横浜	○	○		○			
入船公園					○	○	○
横浜SF高校	○		○		○		
北部第二水再生センター	○			○	○		
横浜技調	○	○	○				
東芝京浜事業所			○	○	○		
貨物線の森					○	○	○
調査地点(内陸部)	19日	20日	21日	22日	23日	24日	
三ツ池公園	○	○	○		○	○	
二ツ池					○	○	



トンボはどこまで飛ぶか調査2014(本調査)

◆調査日程・調査場所

京浜臨海部：8月4日（月）～9日（土）・16日（土）

内陸部：8月19日（火）～8月24日（日）

調査場所別調査日程：左表による。

◆調査時間：各地点午前中の2時間

◆調査参加者数 調査期間 延べ184名

# トンボとり大作戦 2014

トンボとりをとおして、自分たちの住む地域の自然環境に興味を持ってもらうため、より多くの機会を子どもたちに提供しようということで、今年は6月～10月まで毎月トンボとり大作戦を実施することになりました。調査を通して飛来するトンボの種類の季節変化も確認しました。

トンボとり大作戦の開催に先立つて、近隣の小学校に宣伝チラシを配布したことが功を奏してか、6月は27人、7月は12人、8月は20人、9月は6人、10月は15人と延べ80人の子どもたちが参加してくれました。参加者は親子連れや兄弟や友達同士での参加が多かったように思いますが、毎回1人で参加してくれた昆虫少年も現れ、将来が楽しみです。

今回のトンボとり大作戦では、環境活動の仲間の山村さんに蝶やバッタなど、身近な昆虫の観察会を特別に実施していただき、トンボがあまりとれなかつた日にも楽しみが多いプログラムとなりました。

6月から10月までにアキアカネ、ウスバキトンボ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、チヨウトンボ、ギンヤンマの7種類131頭のトンボを捕獲・マークイングしました。季節的には、初夏に大陸から渡つてくるウスバキトンボや秋に山から下りてくるアキアカネの飛

## 入船公園



トンボとり大作戦の開催に先立つて、近隣の小学校に宣伝チラシを配布したことが功を奏してか、6月は27人、7月は12人、8月は20人、9月は6人、10月は15人と延べ80人の子どもたちが参加してくれました。参加者は親子連れや兄弟や友達同士での参加が多かったように思いますが、毎回1人で参加してくれた昆虫少年も現れ、将来が楽しみです。

来が例年より少しだけ遅かつたように思いましたが、田口先生の報告（P14～10）では、それ以上の変化があるようです。興味ある方は、是非ご一読を。また今年も、多くの子どもたちの参加を期待しています。（よこはま里山研究所 島村雅英）



## JFEトンボみち



JFEトンボみちにおいては、休日に遊びに訪れた子どもたちに声をかけて、トンボとりへの参加を誘うことにしました。すると、例外なくすべての子どもが参加してくれました。同伴の保護者のなかにも楽しそうに参加してくれる方もいます。トンボとりだけではなく、トンボ池の生きものにも子どもたちは興味津々です。モツゴ、メダカ、エビ、ヤゴなどを捕獲して水槽に入れて観察してもらいました。また、池の周りなどの石のすきまにひそんでいるカナヘビを一生懸命に追いかける子どもたちもいました。

自然との共生に向けて、チヨウトしたきっかけが、未来を担う子どもたちの目を開かせることを信じて、今後もこの活動を続けたいと思います。

### 【実施記録】

実施期間…6月～10月  
実施回数…計10回(原則月2回)  
実施時間…1回2時間  
(原則9時～11時)

参加人数…小中学生延べ26名  
捕獲頭数…計77頭(新規68頭、再捕獲9頭)

捕獲種数…8種(アキアカネ、コノシメトンボ、ウスバキトンボ、オオシオカラトンボ、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、チヨウトンボ、クロスジギンヤンマ)  
(トンボみちファンクラブ 柴田芳宏)



おじいちゃんと一緒に(9月21日)

# 参加者の声

## トンボの調査



トンボみちができた時、お父さんから教えて初めて行ったからもう何年もたちます。トンボみちファンクラブに入れてもいい活動するようになります。

最初はヤゴの観察をしたり池の掃除などをしました。ヤゴがトンボになつてから観察や調査をしました。

トンボの調査の方法は、トンボを傷つけないように網でとります。とったトンボの羽に番号を書いて逃がします。番号は捕まえた場所が分かるようになつています。

そして公園などで番号の付いたトンボを捕まえてどこから来たトンボかを調べます。僕はトンボが色々な所や遠い所へ飛んでいくのがすごいと思います。今度は、三ツ池公園とかに行つて僕もトンボを捕まえて、調査したいと思います。

(鶴見小学校4年 高木博乙)



いたり潰したり(?)等、かな  
り詳しくはわかるようですが、  
自然の中での動物等傷つけず  
そのままの生態を根気よく観察  
し続けることでわかることが多い  
くさんあるだろうし、より身近  
な存在に感じられるようになる  
のではなどと、網を振り回し  
ながら感じています。

(土肥文枝)



このトンボはどこからやつてきたのだろう。まちでトンボを見かけると、そう思うようになった。捕まえ、観察する、記録する、空へ放す。大人から子供まで、調査中は誰もがトンボの研究者だ。企業緑地の存在やエコロジカルネットワーク、生態系に関する様々なことを、トンボを介して学ぶことができる。自然と人をつなぐように、トンボは今日も京浜臨海部の空を飛んでいる。(大学生 山科一輝)

飛んでいます。  
(大学生 小泉恒紀)

トンボを追い掛けるのは久しぶりで、夢中で捕りました。トンボという誰もが知っている生物を通して森づくりを進めるという手法は面白いと思いました。

(大学生 富田ひかる)

お誘いを受け、友達三人と、のんびりおしゃべりタイムくらいの気持ちで参加しました。ケンウッドのビオトープは、思つていたよりずっと小さく、綺麗に整備された公園という感じでした。調査方法の説明を受け、こんな方法で、トンボの生態行動が把握できるんだ?でもこんなところに飛んでくるのだろうか??:ましてやこの炎天下に??などと思いつつの調査開始。最初の一匹の飛来・見つけはしたものの網には入つてくれない(無理もない)。その後、その日参加された先生が、一匹捕まえマーキングをして放した。その日は、3~4匹の飛来のみ。でも、こんな地道な調査をしている活動ができる日でした。

その他に、子ども達の教育という意味

## 京浜臨海部のビオトープから確認された水生昆虫

東京都市大学 佐野 真吾



写真2. 東芝では幼虫も見つかった。

2014年度、京浜臨海部のビオトープで、水生甲虫類(ゲンゴロウ類やガムシ類など)および水生半翅類(水生のカメムシ類を中心とした水生昆虫の調査をさせていた)を行いました。私が調査させていたのは、マツダ、JVCケンウッド、キリンビル、東芝、北部第二水再生センターの5カ所で、13種類の水生昆虫を確認することができました。

今回の調査で印象的だったのは、横浜市内では2例しか記録のなかつたチャイロチビゲンゴロウのビオトープから見つかることです(写真1)。チャイロチビゲンゴロウは、体長3.5mm程の小型のゲンゴロウ類です。神奈川県内では真鶴半島や三浦半島から多く記録されおり、岩石海岸で見つかり、それらはいずれも京浜臨海部磯子区の2例しかなく、岩石海岸のない横浜市内での生息は難しいと思われていました。しかし、今回の調査で4カ所の新産地が見つかり、それらはいずれも京浜臨海部のビオトープであるということは大変興味深いことだと思います。ちなみに、市内では2例しか記録がなかつたと述べましたが、2例目の記録も京浜臨海部にある企業のビオトープから発見されたものです。つまり、岩石海岸のない横浜市内では、京が、2例目の記録も京浜臨海部にある企業のビオトープから発見されたものです。つ



写真1. チャイロチビゲンゴロウ

の調査だと思っています。今回この調査に参戻ることができて良かったです。(大学生 五十嵐貴之)

昨今動植物研究等、すべてが遺伝子レベルになつているようですが、組織の一部をとりだし、碎

り回せるのが楽しくもつと捕まえられれば……。

トンボを通じた環境作りという意味の他に、子ども達の教育という意味で、組織の一部をとりだし、思

いを馳せることができます(写真2)。

報告書をいただき、川崎の夢見が崎辺りまで来ていることを知つた。トンボから命の力強さにあらためて思

いを馳せることができました。(小林淑子)

# 開催報告

## 企業緑地講習会



企業緑地はそれぞれの面積が比較的大きいことから、質の向上を図ることでいきものを呼び出すことや地域環境の改善に貢献できることが活動をとおしてわかつてきました。

企業緑地の持つ価値や役割について考えるため、平成26年12月10日、横浜市鶴見公会堂会議室にて、企業関係者32名、行政関係者8名の合計48名の参加のもと企業緑地講習会「ルート1の企業緑地に学ぶ～小さな緑をつないでつくる生物多様性～」が開催されました。

講習会では、田口正男先生より「なぜ生物多様性なのか？なぜトンボなのか？」と題し、生物多様性の基本的な考え方やトンボを指標生物とした環境の評価について、事務局より「企業緑地の価値や機能、地域の企業緑地の変遷を背景にした京浜臨海部の企業緑地の位置

づけ、企業緑地が持つている里山的機能についてなどの講演がありました。

その後、鶴見「みどりのルート1」をつくる会※の高田房枝会長より、「国道1号線沿線における企業敷地の緑化事例に学ぶ緑化のメリット」と題し、地域の歴史から緑化を進めようと考えたきっかけ、地域緑のまちづくりの活動経緯、アンケート調査から得られた地域住民の意識と事業進捗に伴う事業者の緑化に対する意識の変化などが報告されました。

最後に横浜市みどりアップ推進課より、緑化を進めるための支援制度の話がありました。店舗の緑化が進むことで、お客様が喜んで行きたくなるという報告は興味深いものでした。参加された方々の今後の環境改善の一助となつたことを期待します。

※鶴見「みどりのルート1」をつくる会については、P7～8の活動紹介のページをご覧ください。

## 「第25回 全国トンボ市民サミット in ございしょ」に参加して

トンボみちファンクラブ 柴田芳宏

日本全国みんな夏休み(?)といふことで、7月26日に夏休みをいたで三重県菰野町へ行つてきました。ロープウェイで訪れた場所は、標高1212mの御在所岳の山頂。下界の暑さを感じない気温26℃のなかで、アキアカネが群れで風に戯れるように飛んでいます。リフトのロープにつかまつて移動するチャツカリしたトンボもいます。

翅にマーキングしているおじさんは聞いてみると、なんと今日の個人的な目標は700頭!!捕虫アミの中には、30頭ほどのアキアカネがひしめいているではないですか。そして、それらの翅に御在所岳を示すG印をつぎつぎとマーキングして放してゆくのです。おじさんの首にはオス用、メス用のそれぞれのカウンターがぶら下がっています。その動きはまったく職人技です。

山頂の案内所のお兄さんから、御在所岳でのマーキング調査は43目であること、アキアカネの数は昔の5分の1に減つていてること(それでも、2013年のマーキング数は、29736頭と桁はずれ)、秋には下界へ降りていって、一番遠くで確認されたアキアカネは福井県敦賀市(約75km)であることを教えてもらいました。



ロープウェイとアキアカネ  
(大会パンフレットより)

### 【全国トンボ市民サミットとは】

トンボをシンボルにかけて、自然環境の大切さを考えていく年次大会で1990年に横浜市で始まりました。それは自然との共生をめざして活動している全国の市民団体の情報交換、交流の場でもあります。

さて、2015年は7月19日、20日に童謡あかとんぼの作詞者三木露風の故郷である兵庫県龍野市で開催されます。みなさまも参加して楽しみませんか！

2015年は7月19日、20日に童謡あかとんぼの作詞者三木露風の故郷である兵庫県龍野市で開催されます。みなさまも参加して楽しみませんか！

# トンボはドコまで飛ぶかフォーラム 報告会

## 「かんきょう横浜」への 寄稿を受けて

今年の報告会は、はじめての試みとして「横浜の水辺と緑を考える子ども会議」と同時に開催をしました。12年間の活動を通じてトンボとり大作戦や本調査でわかつたことの報告会を実施しました。

3月29日（日）にトレッサ横浜という港北区のシヨツピングセンターの中で開催されました。トレッサの中に師岡コミュニティハウスがありそこで報告会、また南棟2階のガーデン前でワークショップも実行しました。

報告会の内容は、まずはトンボ博士である田口正男先生より「トンボでつなぐ京浜の森」のお話がありました。

フォーラムの活動の紹介、京浜臨海部にトンボネットワークは存在しているのか、なぜトンボなのかに始まり今回の調査でわかつってきたことのお話がありました。

トンボたちにとつて企業や公園の緑地は里山として機能していることなど

た。シオカラトンボの急増、基本6種に偏った種構成やなぜ8月に赤トンボが出なかつたのかなどの興味深いお話もありました。その後舞岡中学の科学部の生徒から「舞岡川のハグロトンボ」の調査結果の話もあり、子ども会議との同時開催の意味合いを感じる一場面でした。

また2階のワークショップの方は買い物な

どに来た来館者にも見てもらえ、人気のコーナーでした。トンボのぬり絵でトンボの生態環境について学び、また顕微鏡でヤゴの観察もしてもらいました。一般の市民の方にトンボフォーラムのことを知つていただきよい機会になつたと思います。

かんきょう横浜に6回に亘つてご紹介いたしました貴フォーラムの活動内容は大変興味深く、また、トンボ調査による生態系の把握をベースとした環境の保全・再生・創出活動は会員企業にとりまして生物多様性の保全活動の参考になつたのではないかと考えております。

また、会員企業からは、京浜の森づくり事業や企業緑地講習会など市や企業の環境保全活動に関連した記事は参考になつたとの意見や、横浜市や企業などそれの立場の視点から書かれた「参加者の声」は読者や企業が環境に興味を持つ機会になつたとの意見が聞かれました。さらには、環境活動の参考にするために記事を社内に掲示したいとの意見が寄せられ、企業の環境活動の一助になつたものと思つております。

最後に、お忙しい中、かんきょう横浜へご寄稿いただきました貴フォーラムのご担当の方々へ改めて感謝申上げます。



横浜市環境保全協議会は、市内の企業や事業所における環境保全活動を推進するため、環境保全に関する情報の提供や講習会の開催、かんきょう横浜（会報誌）の発行等、様々な活動を行つております。

こうした中、広報編集会議において、平成26年度の会

報誌の特集について検討していたところ、会員企業の環境活動の参考となることから、市内で積極的に環境活動を行つている団体に活動内容をご紹介いただいてはどうかとの意見があり、貴フォーラムへ寄稿をお願いいたしました。

かんきょう横浜に6回に亘つてご紹介いたしました

貴フォーラムの活動内容は大変興味深く、また、トンボ

調査による生態系の把握をベースとした環境の保全・再生・創出活動は会員企業にとりまして生物多様性の保全活動の参考になつたのではないかと考えております。

また、会員企業からは、京浜の森づくり事業や企業緑地講習会など市や企業の環境保全活動に関連した記事は参考になつたとの意見や、横浜市や企業などそれの立場の視点から書かれた「参加者の声」は読者や企業が環境に興味を持つ機会になつたとの意見が聞かれました。

さらには、環境活動の参考にするために記事を社内に掲示したいとの意見が寄せられ、企業の環境活動の一助になつたものと思つております。

最後に、お忙しい中、かんきょう横浜へご寄稿いただきました貴フォーラムのご担当の方々へ改めて感謝申上げます。

# トンボはドコまで飛ぶかフォーラム 参加団体 活動紹介

## 鶴見「みどりのルート1」をつくる会 会長 高田房枝

私たちの会は、横浜市鶴見区の国道1号にある北寺尾交差点を中心に約1kmの国道沿いにある学校、レストラン、自動車等の販売店、スーパー、倉庫業などが集まり、緑化計画を立て、各敷地内を緑化しています。

始めたきっかけは、4、5年の間に景観が急速に変わってきたためです。色とりどりの店舗看板が乱立し、店舗建築時は便利になつた反面、騒々しい街の印象です。そこで緑化された沿道をつくろうという呼びかけに企業21社と住民が集まり、平成24年10月、会を設立しました。横浜市のみどり税等を財源とした「地域緑のまちづくり事業」による助成も受け、活動は、企業、住民、行政が協働する形になりました。

緑化計画は、生物多様性の植栽ゾーンをつくり、それを繋いで沿道里山と名付け、沿道緑化のモデルとなることを目指しています。

緑化計画のテーマは、①みどりの拠点をつくる（A商業施設の駐車場B道沿いにみどりをつくるC壁面にみどりをつくる）②みどりを楽しむ（講習会、観察会、交流イベント開催）です。

### 鶴見「みどりのルート1」をつくる会に参加しています



<http://tsurumimidori-r1.jp>  
info@tsurumimidori-r1.jp

計画の方針には、トンボフォーラムの会による調査結果や講義内容等を反映することができました。

緑化後は店舗とお客様との交流、スタッフの方たちの職場環境に予想以上の成果が上がっています。

この3月からは緑化活動賛同者のサポート募集を始めましたが、緑化の維持管理を楽しく継続することが今後の課題です。

よこはま里山研究所 SNORA

里山は、人びとの営みによって、つくり上げられてきた身近な自然です。

そこでは、人びとはたらきかけの違いによって、田んぼ、畑、雜木林、草はら、ため池、小川など、さまざまな景観が広がり、たくさん生きものが育まれてきました。

また、人びとは自然とかかわる知恵や技を、親から子、子から孫へと受け継ぎ、深くて豊かな文化が残されました。

しかし、現在、多くの里山が経済的な価値をうしない、人びとの関心の外へと置かれています。NORAは、かつての里山がそうであつたように、私たちの暮らしと里山との間の距離を近づけることによって、生命（いのち）のつながりを感じられる機会を取り戻します。

そして、身近な里山が輝くようになれば、その自然の恵みを生活に取り入れることにより、私たちの暮らしも豊かになると信じています。あらためて人と里山の豊かな関係を結び直すためには、今は見えなくなつてしまっている里山の価値や、まったく新しい里山の価値を掘り起こすことが必要です。

そして、その価値をシゴト※へと変えていくこながう、自立したNPOとして成長していくこ

# あおぞら自然共育舎 代表 早川広美

私は「あおぞら自然共育舎」を主宰し、自然体験型環境教育の仕事をしていますが、ネイチャーゲームや自然観察、保全作業の指導などと共に、「トンボを指標としたビオトープ活動」の「コーディネイトも柱の一つとなっています。

参加者の皆さんに對して「トンボは

1kmくらい飛んで移動するので、半径1km」と「ジオトープが連續してあれば、トンボ（生きもの）が行き来できるネットワークが形成される」という話をしていました。

しかし、「トンボは1km飛ぶって、自分では確かめていないじゃないか」と

ということが頭にあり、何とか自分なりに腑に落ちるようにしてみたいと機会をつかがっていたところに出会ったのが、この「トンボはどこまで飛ぶかフォーラム」でした。

2008年から調査に參加し、実際にトンボを探り、マーキングをし、その中の何頭かが移動したことがわかり、私の中では「やつた、私はこれを知りたかったんだ！」と本当に嬉しい気持ちでした。



## NORAの參加型プロジェクト

里山の中心には、農村に生きる人びとの居住空間として「ムラ」があります。

その周りには、毎日のように出かける田んぼや畑などの「ノラ」があります。

さらにその周囲には、ときどき柴刈りなどに出かける「ヤマ」があります。

「ムラ」の人びとは、日々、「ノラ」や「ヤマ」でシゴトに励むほかに、「ハレ」の日を大切にして心ゆくまで楽しみ、再びシゴトへと戻りました。

また、里山は、ムラーノワーヤマが同心円を描くように広がる中で、田んぼ、畑、ため池、小川、草はら、屋敷林、竹林、雑木林などがモザイク状になつて、多様でまとまりのある景観を作り上げていきました。それぞれの小さな生態系は、その場をすみかとする「イキモノ」をはぐくみ、高い生物多様性を誇っていました。

やはり、自分の体と心を動かして体験することや、観察や調査、実験で疑問を確かにすることは、本当の自分の血となり肉となる、と思います。私自身の環境教育の仕事でのモットーも「体験による気づき」です。このトンボフォーラムでの活動では、改めてその大きさを私自身が確認でき、仕事において参加者の方々の体験と気づきをより大切にしたいと願う契機にもなりました。

NORAは、互



※シゴト：哲学者・内山節氏によれば、「カセギ」がお金のためにする労働であるのに対して、「シゴト」は自然に包まれたムラで生きていくうえで必要な、人としての役割を意味する。

# 京浜の森 トンボとヤゴの図鑑

## ギンヤンマ



水草にぶら下がって生活します。とても獰猛で、獲物を待ち構えて下唇をのばして魚やオタマジャクシなどを捕られます。

水面が開けた明るい大きな池を好みます。岸沿いに飛びます。ビオトープでも頻繁に観察できます。横浜では4月中旬から10月まで見ることができます。



## クロスジギンヤンマ



ギンヤンマとよく似ていますが胸に2本の黒いスジがあります。腹部は黒く青い斑紋が並びます。ギンヤンマよりも閉鎖的な環境を好みます。横浜では4月初旬から9月まで見ることができます。



ギンヤンマ同様大型のヤゴです。ギンヤンマとそっくりですが防火用水槽のような小さな水辺にも生息します。横浜ではギンヤンマよりもやや早く4月から羽化を始めます。

## コシアキトンボ



成熟したオスの腹部の付け根が白いことから「腰空き」という名前がついています。池の縁にそって高速で飛ぶ姿をよく見かけます。



やや広い池などの水底を這うように生活しています。かなり汚れた池にも生息します。背中に特徴的な大きなトゲがあります。黒っぽい個体が多く見られます。



## オオシオカラトンボ



シオカラトンボに似ていますが一回り大きく青みが強いトンボです。シオカラトンボよりもやや閉鎖的な環境を好みます。横浜では5月から9月まで見ることができます。



シオカラトンボの仲間のヤゴはどれも良く似ています。オオシオカラトンボは背中にトゲがあり同じ場所に生息するシオカラトンボと見分けることができます。

## ウスバキトンボ



横浜では冬を越すことができず、毎年南方から世代を繰り返しながら北上してくるトンボです。ちょうど「ドコまで飛ぶか」調査の頃、群れ飛ぶ姿が見られます。



水草がない池などに見られます。とても成長がはやく1か月程度で成虫に羽化します。寒さに弱く横浜では冬を越すことはできません。

## アキアカネ



近年全国的に数を減らしているアカトンボの一種です。横浜では6月中旬頃羽化していましたが京浜臨海部では8月に羽化している個体が数多く確認されています。横浜では6月から12月まで見ることができます。



三角形の頭をした典型的なアカネ型のヤゴです。田んぼや池、湿地などの水底の泥に浅く潜って暮らしています。以前横浜のブルのヤゴといえばアキアカネでしたが、現在ではコノシメトンボが優占種になっています。